第14回

ていねいな暮らしのあったころ

佐野一彦の撮った伊深の里山

「からげた麦（小麦）を車に積む」　昭和39年6月2日撮影

「麦」

昭和40年代ごろまで米の裏作として、ほとんどの農家が、大麦や小麦を作っていました。11月に稲の株を取り、畝（うね）を作った田にまいた麦は、翌年の6月半ばに収穫します。

右の写真は、刈った麦を束にしてリヤカーに積み、家まで運ぶ様子です。

下の写真は、麦扱（こ）きをする前の麦を軒下に並べて干している様子です。収穫した麦は自宅でコバシを使って麦と麦カラに分けました。大麦は米と炊いて麦飯に、小麦は臼でひいて「ウドンノコ」にしました。また、扱いた小麦を農協へ持って行き、干しうどんと交換しました。

麦カラは、屋根を葺（ふ）く大切なものでした。伊深の草葺（ふ）き屋根は、米ワラを下敷きにし、その上に麦カラを葺（ふ）く「麦カラ葺（ふ）き」の屋根でした。麦カラ葺（ふ）きの屋根のことを「くずや」と親しみを込めて呼び、昭和40年代後半ごろまでみられました。

「麦のとりいれ　軒に立てかけた麦束」　昭和40年6月25日撮影